いことであり、工業用水の採水に当り今更ながなその――計画が杜撰であったことを指摘してやまない。数千億と云われる資金投じて進出してきた大企業の一部が操業早々間もない昭和四十六年の秋、鹿島臨海工業地帯建設協議会（三十四社）代表が県庁に岩上知事を訪れ、北浦（大野揚水場）から採水しておる工業用水の改善方を強く申し入れた。その理由は用水の塩度があがり操業に支障をきたしており、県との約束では塩度を一〇〇ＰＰＭ前後におさえることになっておるが、現在三〇〇ＰＰＭを越えて冷却用水として使用後は八〇〇ＰＰＭにも塩度が濃縮してパイプや機械類を痛めると云うことでありこれに対して県当局は「出来るだけ協力する」と答えておるが、これをもってみてもいかに事前に於いて湖水に対する両者の研究が不備であったことを遺憾無く暴露しておる。その皺寄せとして、宝山水門の建設、目的を無視して永く閉鎖を続け、水瓶化の準備が何等出来ておらない今日の霞ケ浦北浦の汚染に迫車を掛け、漁業を全滅状態に追い込み、湖水を水源とする上水道を危殆に至らしめた。これは唯れの責任か言わずとも明白であろう。

また鹿島工業都市建設に当り神栖町（旧軽野村）中央にあった神の池（周囲約七Km）を無造作に埋立てしまった。これもまた工業用水の導入に対する事前の研究が足りなかった証拠であり、神の池は降之池とも書き、古代の安是湖で寛永十八年諸国大飢饉の際この池により多くの人達が露命をつないだと云う。また奇験記には鹿島神宮の池と書かれてあり、淡水魚類も豊富であった。この由緒ある自然を破壊して今更塩度の高い工水が入るから水門を閉めろなぞとは云えた義理でもあるまい。この池が全存していたら、工水の危期には予備水として充分防ぐことが出来たのである。当時この埋立に反対したが、これを無視して企業に国や県の「ウエイト」が掛かり、工場敷地の一部として埋立られたことは、かいすがいすも残念なことであり、自然破壊の反動は今日におよんでおる。

現在夏期平均の湖水の消費量は（自然消費量を加へ）概算霞ケ浦で一日一八〇万トンで河川からの流入量を見込まない減水率は一四、七五ミリ、北浦では一〇〇万トンでこの内鹿島の工水消費量は二七万トンで減水率は、九、八六ミリであるから霞ケ浦其他の水域から不足量の水が北浦に流入しており、大野揚水場の能力が一日三〇万トン、爪木場が六〇万トンであるから、これがフルに運転されると鹿島のみの工水消費量は一日八〇万トンとなり、北浦に於ける減水率は一日三八、二五ミリとなるので渇水期の減水に大きく迫車を掛けることになる。こ